

近世山村における生業・生活の変遷と資源利用

― 自然と調和する日本人― 像は真実か

はじめに

現在の私たちは、山といえは青々と木々の繁る風景を思い浮かべ、また実際にそうした山を目にしている。しかし、日本の山は昔からそのような姿で続いていたわけではない。明治時代から高度経済成長にさしかかる時期の写真を見ると、山の上まで開き尽くされ、使い尽くされた山の景観を見ることができる。近代以前の山は、木材・薪炭その他さまざまな資源の供給地として、人の生活と深く関わりながら濃密に使い続けられてきたのであった。それはしばしば過剰な伐採を引き起こし、また必要な資源を枯渇させてきた。ところが高度成長後、燃料も建材も食料も海外からの輸入に全面的に依存するようになり、それまで資源の供給地であった山が見向きもされなくなると、皮肉なことに山には緑が溢れるようになってくる。つまり私たちが日頃目にする山の姿は、過剰利用の対極であり、む

にそうした動きがあつたにしても、やはり理念的にも実態としても、それらを自然の保全を基調とした時代とみなしていかどうかは、実証的に事実を積み上げて検証していく必要がある。^{*1} 前近代社会の完成形として江戸時代を措定することは可能であるが、歴史的にみれば、同じ江戸時代の中ですら、その初頭と末期とでは、生活文化に関しても大きな変化が見られる。つまり二百数十年の間にも生活自体は刻々と変遷を遂げているのであつて、「江戸時代の生活」や、ましてや「縄文以来の生活」を自然との関係性のうえで単一的な像として見ることに問題がある。それは後進的・閉鎖的とみなされがちで、平地のような変化がなかったと考えられている山村地域についても同様で、実際にはその時代の政治・社会・経済を反映して多くの変化が訪れている。もちろん自然との関わり方、資源利用のあり方についてもしかりである。

本章では、信越国境 長野県と新潟県との県境にまたがる秋山地域の近世を素材とし、時代条件の変化の中で、自然と人間との関係性にどのような変遷があつたのか、また過剰利用と資源の保全をめぐる葛藤がどのような背景のもとでせめぎあつたのか、そうした問

しる手入れすらされず、荒れた山でもあるのである。

ところが近年、日本人は昔から自然と調和しながら生きる智慧をもつていた」といったイメージが、実態の検証なしに耳当たりのいい言説として巷間に流布している。過剰利用にせよ手入れの放棄にせよ、およそ「自然との調和」とは言い難い実態がこれまでの日本にはあつた。その一方で、山間地域に生きてきた人々の中には、確かに「賢明な利用」と呼んでいい持続的な資源活用の智慧も存在した。愚かな利用と賢明な利用、この二つはどのような背景のもとに生じたものなのか。またそれらを現出させた論理は何であつたのか。私たちは今こそイメージ先行の空虚な言説を捨てて、歴史的なその実態を正確に知っておく必要に迫られている。

ところで「自然との調和」を話題にする言説にはある特徴がある。それは弥生時代も古代も中世も飛ばしてなぜか縄文時代と江戸時代とを「自然に優しい」持続的な資源利用の時代としてことさらに持ち上げる傾向である。賢明な資源利用の起源が縄文時代に求められたり、あるいは江戸時代が自然と理想的に共存していた時代であるかのように説かれることが多い。一部

題をたどつてみたいと思う。^{*2}

一 秋山イメージの虚実

秋山地域は、信濃川の支流中津川に沿った上流部を指す呼称で、現在は「秋山郷」の観光地名で知られる(図1)。当地は江戸時代に、「山深い 秘境」への関心から、『北越雪譜』の著作で知られる文人鈴木牧之が「一週間ほどの旅をし、挿絵入りの詳細な紀行文『秋山記行』」を著した地として著名である。^{*3} いわば人跡稀な「閉ざされた山村」の典型と見做されてきた地域

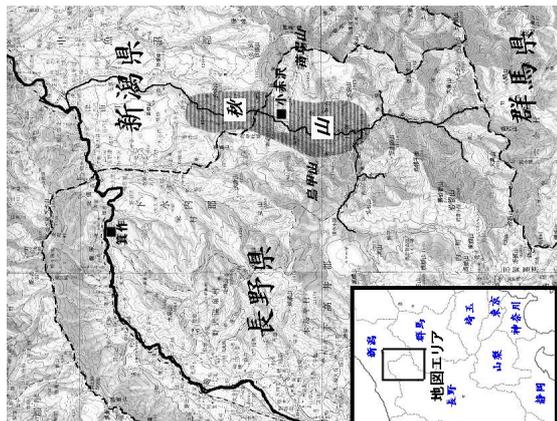


図1 秋山の位置図

であり、世間的には、プラスの評価をすれば「古き良き生活文化が残る」、マイナスの評価をすれば「文化的に後れた生活を長く営んできた」場所と見られてきた。民話に「愚か村話」というジャンルがあり、全国各地の「後れた生活」をしていると認識されたところが蔑みと笑いの対象とされたが、秋山もその一つに数えられている。^{*4} もちろんそれは山村生活の豊かな智慧や技能を知らない平地人の勝手な作り話であり、後述のように山には山のすぐれた生活文化の体系があったのである。^{*5} しかしいずれにしても、秋山で営まれてきた生活スタイルに関する従来のイメージは、『秋山記行』に描かれているような近世後期の生活様式に関わる見聞や、また近代以降の古老からの聞き取りによる生活文化の情報をもとにしたものであった。

曰く、広大な山地を見渡す限りの焼畑に拓き尽くしてアワやヒユなどを作り、基本的な食糧を生産してきた。曰く、トチやブナなど広葉樹を素材にした木工品づくりが盛んに行われ、人々の重要な生業となってきた。曰く、秋田マタギの系譜を引く伝統的な狩猟文化が現在に至るまで長く伝えられてきた。

確かに『秋山記行』を見ても、拓き尽くされた広

とを表しているのか、それを厳密に辿ってみる必要があるのである。そこで以下に、比較的大きな変動が秋山を覆ったと考えられる一八世紀後半から一九世紀前半にかけての社会状況を追いかけてみる。秋山の古き良き伝統とされてきたような生活のあり方は、おそらくその頃につくられたものではないかと考えるからである。

また前述したように、私たちが、伝統的な生活は常に自然との関係に配慮して営まれてきたようなイメージを抱きがちなことにも注意が必要である。長年にわたる自然とのつきあいの中から、山菜や動物の獲り方、あるいはその保全などに関し、さまざまな智慧・技能が磨かれてきたとは、よく言われることであり、確かにそうした一面があつたのは事実と考えられる。がしかし、いつも誰もがそうであつたわけではない。そこには人間の欲や自然との複雑な関係性があり、常に持続的な自然資源の利用を実現してきたわけではなかつたのである。

大事なことは、過剰利用や逆に資源の保全を求めた論理がどのような背景をもっていたかということであり、また問題の発生したときに、当地の人々がどのよ

うな打開策を見出してきたかという点である。資源の枯渇や人間社会内部の矛盾や葛藤が起きると、それまでにない生業やルールが生み出され、そこから新たな伝統と呼べる生活文化が築かれてきたと考えられる。山がそうした人間―自然関係の再生をなぜ可能にしたか、という点もまた重要である。そこには山という場に特有の資源特性を考えなくてはならない。

二、『秋山記行』の語る変化

― 世の中は天変いたし申した―

中津川沿いを廻り、大赤沢の集落に着いた鈴木牧之は、その地で八〇才を越えた古老藤左衛門から次のような言葉を聞いている。

世の中は天変いたし申た。かかかる立木も知らぬ山中迄、^{おこり}驕りが増長して、拙^{つち}若い時分とは、天と地と、白いと黒いと云程違ひました。^{*8}

前後の具体的な記述からして、これは単なる文飾とは思われぬ。『秋山記行』が書かれたのは、文政一一年（一八二八）、つまり一九世紀前半だが、大赤沢藤左衛門の生きた時代の中に、大きく世の中が変化したというのである。藤左衛門の「若いとき」とは、一八世

紀後半（一七〇〇年代後半）にあたることになるが、では、この頃にどのような変化があったのだろうか。

まず挙げられるのは、家構造の変化である。『秋山記行』では、大赤沢・小赤沢の場面で、家屋の構造に関する記載が見られる。それによれば、数十年前までは秋山の家々は基礎も土台も据えない掘建て造りだったという。それが近年は基礎を据え、土台も設え、梁をもち、柱には貫穴を掘る構造に変わってきたというのである。^{*9}壁も萱を掻き付けた草壁から土壁に変化をみせつつあった。また、食事に関しても、以前はナラやトチの実を中心としたものだったが、近年は粟・稗を多く食べるようになり、これは驕ったことで嘆かわしいと古老は語っているのである。^{*10}夜具に関しても、里のような綿入れをもつ家が出てきたと述べられている。^{*11}

つまり、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて、生活の諸部面でさまざまな変化が見られたということになる。しかし、それだけではなかった。

とくに注目したいのは、この時期の世帯数の増加ぶりである。次の表は、史料上で確認できる世帯数を拾い上げたものであるが、一八世紀前半から一九世紀前

半の一世紀に世帯数が倍増したことがわかる。世帯数が二倍になったからといって人口も倍増したとはいえないが、かなりの人口増加があったことは間違いないであろう。一九世紀初頭の日本の人口は二六五〇

表1 秋山における世帯数の変遷

西暦	年号	世帯数
1698	元禄11	14
1709	宝永6	23
1711	正徳1	21
1730	享保15	38
1735	享保20	37
1737	元文2	37
1738	元文3	33
1825	文政8	67
1828	文政11	67
1837	天保8	77
1935	昭和10	100
1956	昭和31	132
1975	昭和50	132
1985	昭和60	125
1995	平成7	131
2006	平成17	127

←18世紀半から19世紀初頭にかけて倍増している。

←幕末から昭和初期にかけて1.3倍に増加している。

万人ほどとされ、現在の五分の一程度であるが、当該一世紀の間に特別人口増加があったとは考えられていない。^{*12}ではなぜ、この時期に世帯数が大きく増えたのか。現時点では明確な答えは提示できないが、北接する越後からも周辺の信濃地域からも薪や材木、それに木工品材料の伐採が急速に進んでいることからすると後述、都市・平野部での商品経済の活発化が背景にあつたことは否定できない。それらの要因が秋山における商品生産を拡大させた結果とみることもできるが、この点はもうしばらく課題としておきたい。いずれにしても、この時期、秋山の世帯数が大きな伸びを示したことは記憶しておく必要がある。

三. 生業・生活の変化と資源の枯渇

では、この人口増加が秋山に何をもたらしたのであろうか。その一つの影響と考えられるのは、焼畑の拓き尽くしである。

安永九年（二七八〇）、大秋山村と矢櫃村との間で、焼畑地をめぐる争論が起こった。大秋山の住民が近辺の山林を拓き尽くし、矢櫃村間近の山へ進出したことがきっかけであった。史料によれば、土地悪しく耕

地狭く、焼畑作り尽くし、手詰まり」になつて、矢櫃村の方まで開発しようとしたという。^{*13}すでにこの頃には、畑地不足が深刻になってきているのである。これも世帯数増加が大きな要因と考えられよう。もつとも、秋山内部でも、集落によつては近代に至るまで焼畑をどこに開くかは自由であつたという所もある。^{*14}従つて一律に秋山全体で焼畑地が拓き尽くされたとは言えない。ただ、一八世紀後半になつて焼畑地の不足する集落が現れ始めたことは確認しておく必要がある。

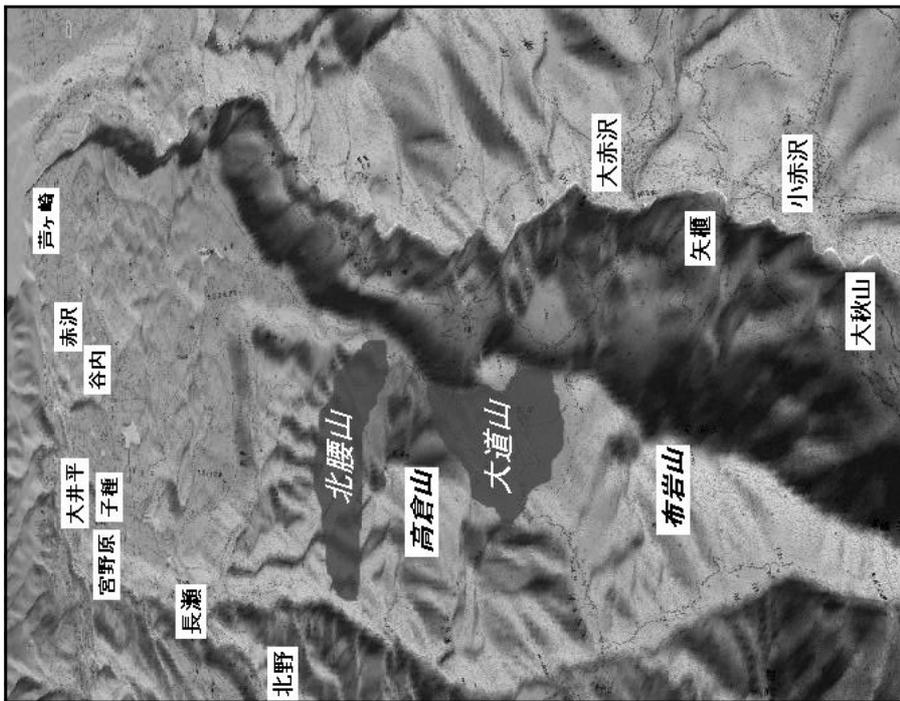
他にも、森林環境自体の変化をみることができる。それは同時期における利用樹木の伐り尽くしという形で顕れた。文政八年（二八二五）に書かれた「秋山様子書上帳」によれば、^{*15}昔は樺（カハ）中略・姫小松中略・五葉松など稀にこれ有り候へ共、用いる事を知らず候所、百年前より此の物器に成るべきを覚え、曲物を製し、樽を取り売り、余程の助成に相成り候所」とあるように、以前は針葉樹を材料に曲物や板材を作り、生活を支えていたのである。ところがその後、大欲は限り無し、材木は数百年経申さず候ては用立ち難く、限りあるのゆえ伐り尽くし、只今は材木御座無く

というように、それらを伐り尽くしてしまったのである。広葉樹は無尽蔵ともいえるほど豊富にあったことからすると、史料上で「材木」と読んでいるのは針葉樹のことであり、当時まではそれこそが利用価値の高い資源と考えられ、広葉樹はさほど重要なものとは認識されていなかったことがわかる。宝永六年（二七〇九）の書上では、「桶・鉢・曲物・板木」を製作と述べているが、^{*16}桶も曲物も針葉樹が材料であったこと、また板も作りやすさからまずは針葉樹材が優先して利用されたと考えられることからすると、確かに一八世紀初頭までは針葉樹材を使用した木工品が中心だったことになる。

そして材料枯渇の事態は、単に秋山の住民自身による利用が招いただけではなかった。一八世紀前半以降、周辺村から秋山に対しての森林伐採圧力がかかってきたことも見逃せない。享保五年（二七三〇）の史料によれば、^{*17}夜間瀬村・上木島村・毛見村等の西側周辺地域から秋山へ一日に八百人から千数百人の者が徒党を組んで侵入し、サワラ・トドマツ・ツガ・ゴヨウマツなどの木をわがままに伐採すると秋山の者たちが訴えている。

しかも、周辺からの伐採は西側からにとどまらなかった。北接する越後国の領内からも住民が大挙して押し寄せ、大規模に伐採を続けていたのである。享保三年（二七二八）に勃発する信濃国の巢守衆と、越後六ヶ村赤沢・谷内・芦ヶ崎・大井平・子種・宮野原及びその枝村との争論がそれで、享保一五年に幕府の裁許が下るまで、激しい訴訟が続けられるのである。^{*18}この争論は、信濃国箕作村・志久見村の巢守たちが守る巢鷹山（北腰山・大道山）に越後衆が入り込み、多量の樹木を伐採したことが問題とされた事件であった。巢鷹山とは、鷹狩りに使う鷹を捕獲し、領主に献上する目的で設定され、樹木の伐採や営巢期の立ち入りなどが領主によつて厳しく規制されていた山のことである。少なくとも鎌倉時代以来、当地は巢鷹の産地として知られ、^{*19}江戸時代には秋山の周囲にも四ヶ所の巢鷹山があり、^{*20}幕府から一定の扶持を与えられて巢鷹山を管理し、鷹の子を献上する巢守が地元百姓の中から任命されていた。^{*21}ところがその山林が、激しい伐採にさらされることになったのである。

そのきっかけは、大公方で知られた徳川五代将軍綱吉の「生類憐れみの令」であった。「生類憐れみ」



【図2】越後との争論となった巢鷹山と周辺集落の概念図

の一環として、幕府は元禄元年（二六八八）に将軍や諸大名が行っていた鷹狩りを停止し、鷹雛の献上も無用としたのである。^{*22}その後正徳年中（二七一七〜一七二六）に巢鷹献上が再開されるまでの約三十年間、巢守の人々はその役目を失い、巢鷹山の管理はおろそかになった。^{*23}この間に越後の人々は巢鷹山に入り込み、生活を支えるために木を伐り続けてきたのであった。いざ巢鷹献上が再開されて巢守が山を確認すると

、巢鷹山間近まで激しい伐採の手が伸びてきていたのである。こうして秋山の下流域に当たる高倉山山麓を舞台に、争論が展開されることになるのである。^{*24}

さらに一八世紀後半は、天変地異が続く。秋山の根本と称された大秋山集落の滅亡が天明三年（二七八三）であるが、^{*25}これは有名な浅間山大噴火の年にあたる。

さらに天保八年（一八三七）には、天保飢饉の最中に甘酒集落が減びている。^{*26}一八世紀は、秋山諸村にとっても、生業・生活スタイルの大きな節目となる時期であつたといえるのである。

四．森林環境の変化と対応

以上のように、一八世紀の間には、さまざまな形で森林利用の形に変化が見られた。人口増加や経済状況の変化にともない、森林への圧力はそれまでに強く、秋山の外部からも内部からも森林の伐採というある種の「環境変化」が起こつた。ただ、ここで注目すべきは、内部での伐採と外からのそれに対して、地元住民の対応に大きな差異があつたことである。

まず外部からの伐採について見ていこう。こちらは薪・材木・板木等の需要増大にともなう他村領への侵入、そして無秩序大量伐採ともいえる伐り荒らしである。秋山の西部及び北部からの伐採は、一日数百人以上という多人数での大量伐採であつた。これは小規模家族経営的な材料採取とはおそらく質を異にした動きとみることができる。自給的な薪などの採取ではなく、商品生産のための材料を短期間に大量に確保するため

かこの森を守ろうと働きかけてきた。^{*29}秋山は、平野部の人々や領主からは貧しい生活を強いられた地域として認識されていたが、その住民が、この訴願に関しては、道中の路銀は負担するので、江戸への出訴も考えて欲しい」と必死の嘆願を名主に対して行つており、いかに切実な問題であつたかが知られる。中でも、越後領からの伐採に対しては、係争地が巢鷹山であることを強調し、もつぱら巢鷹山への違法な侵入・伐採を問題にする形で、訴訟を提起している点が注目される。これは言い換えれば、巢鷹山制度を盾に、支配者の権力を利用して相手方を排除しようとしたということもできる。そして実際、それは功を奏し、信濃側勝訴の裁許が出されたのである。

とはいえ、判決は、信濃・越後双方の百姓に対して巢鷹山への立ち入りを禁止とする主旨であつた。しかし信濃方が望んだのはあくまで越後側からの侵入を抑えての自分自身（信濃側百姓）の森林利用であり、決して領主のために巢鷹を獲得することのみを目的としたわけではなかつた。つまり、現実には巢鷹山も利用の対象ではあつたわけである。その証拠に、以前は山手を信濃側に支払つて越後衆も山を利用してきた事実がある

の行為であろう。新たな商品の発現にともなつて、ある限りの資源を村内部のみならず外延部に向かつて消費しつづけていく強い動きを、そこにみる事ができる。

ここで注目したいのが、越後領諸村からの大量伐採の特徴である。その際の史料では、前々は越後山内場広にて材木・薪等・荒木迄も伐り取り申し候えども、教拾年の間に伐り尽し、近年信州地内御巢鷹山え強勢に入り込み申し候」と、越後諸村が自領の立木を伐り尽くしたために信濃の巢鷹山にまで侵入してきた旨が記されている。^{*27}当時作られた絵図を見ても、高倉山北麓の越後側地域には立木がなく、畠が開かれつつあるさまが描かれている。^{*28}すなわち、この伐採は、特定の樹種、あるいは針葉樹・広葉樹を選別しての伐採ではなく、手当たり次第に立木を皆伐する形で進められてきたものであつたことがわかる。言い換えれば、森自体の消失をも厭わない激しい伐採であつた。自領も他領も関係なく、商品生産のためにはなりふり構わぬ伐採に突き進む状況が見て取れる。

これに対して、秋山の住民は一八世紀初頭から、家業が成り立たなくなる」として反対の訴願をし、何と

し、^{*30}判決後も越後側からは別途信濃側の勝訴を踏まえての利用申し入れが行われている。^{*31}

次に、秋山内部において見られた、特定の利用樹種の過剰利用問題について見ていきたい。大欲は限りなし」との史料文言にもあつたように、この件は、外部からの侵入・伐採を阻止しようとした秋山の人々自身が、目前の生活のためにサワラ・トドマツ等の伐採を過度に繰り返し、その結果、針葉樹材の枯渇を引き起こしていたのである。こうした商品需要の増大が、秋山において世帯数・人口の増加をもたらす背景であつたと考えられるが、このことは、秋山の人々が常に「自然に優しく」生きてきたわけではなかつたことも示唆している。

しかし、資源が枯渇しようとも、住民はそこで生き続けなければならない。そこでさまざまな智慧を絞り、対応しようとした。具体的には、これまであまり利用されていなかつた広葉樹材への材料転換である。もちろん木鉢が作られているように、以前から広葉樹材は利用されていたが、それが主体となつてくるのは一八世紀後半以降と考えられる。近代から現在までの秋山の木工品は、日用品としては、ブナを材料にしたコー

スキ木鋤^(一)雪下ろしなどに使われるスコップ様のものやトチを材料とした木鉢、^{*32}調度品としてはトチなどの大木を利用したテーブルや衝立などが中心となっている。つまり、針葉樹を使った曲物や桶づくりだけでなく、木地物の製作へと生業内容をシフトさせたのである。秋山の広葉樹材利用の木工は、ある意味では「仕方なく」始められたものなのであつた。利用資源の枯渇が起これば、常にそれに対応していくというのが一つの方程式であつた。こうした動きは、近代から現代に至る過程の中でも繰り返されてきている。^{*33}

以上二つの「環境改変」は、どちらも資源の枯渇が共通点となっているが、ただここで見逃せない相違があることにも留意しておかなくてはならない。他地域からの無秩序大量伐採の場合は、森自体の消失を厭わないのに対して、秋山の場合は針葉樹は伐り尽くしたとはいえ、広葉樹の森までも皆伐しているわけではなく、「森が無くなつては生活が成り立たない」と訴えたように、むしろ森林自体は保護しようという姿勢が見られることである。この相違はどこから来るものであろうか。

始めとする川での漁撈、そして傾斜地の山野で行う焼畑など、複合的な生業を営むことのできる場であつた。この複合性こそが山村の大きな特徴であり、単一あるいは少数の生業から成り立つ平野型の生活文化体系とは趣を異にする点である。その意味では、特定樹種を枯渇させることはあつても、森林に覆われた環境そのものを消失させては生きていけないのであつて、逆に森林が保全されてさえいれば、ある生業が持続できなくなつても、他の生業に代替させていくことは充分可能であつたのである。^{*35}この複合的生業構造にこそ、秋山の人々が山の環境を保全しようとした根本的な理由があつたと考えられる。

しかし、こうした考えは、なかなか平野部の人間には理解されないものであつた。江戸時代の秋山地域は、行政的には千曲川沿いの平地にある箕作村の飛び地として扱われていたが、その箕作村の名主が、秋山の経済的困窮を救済してもらおうと領主に提出した書類がある。^{*36}

そこには平野部と奥山との生活観や生業意識の落差が如実に表れており、すでに近世から、平地の者には山の環境に基づいた生活文化が理解されていなかったこと

五. 秋山住民にとっての山とは

背景として考えられるのは、集落の立地と生業の相違である。越後側の諸村は、集落自体は中津川左岸の比較的平坦な河岸段丘上に位置し、必ずしも奥深い山中の村ではない。すでに近世には水田も開かれ、必ずしも秋山のように山地を主要な生業の舞台としているとは考えがたい。^{*34}もちろん薪炭林や刈藪採取地としての利用などはあろうが、どちらかといえば平地村的な要素が強いと考えられる。その意味では、森林環境の大幅な改変も集落の存亡に関わるほどのものとは認識されていなかった可能性がある。

これに対して秋山は、山を舞台に生活を成り立たせてきた地域であつた。山は単に建築材や木工材料としての樹木のみを資源とする場所ではない。一般に山村＝林業と、山の資源といえば建築材の生産を連想することが多く、林業の成否のみで山村生活の質が云々されることがしばしばある。しかしこれは山村の一面しか理解しない偏つた見方である。山は、カモシカやクマなど野生動物の狩猟、秋山ではかつては主食であつた木の実^(二)とくにトチの実の採集、あるいは山菜・キノコなどの食料や薬・生活資材などの採集、イワナを

とがはつきりとわかる。以下、この点を少し掘り下げてみたいと思う。^{*37}

右の史料はかなり長文の上申書で、秋山の立地、世帯数や人口、衣食住から生業や信仰に至るまでの生活ぶりについて詳細に述べたあと、住民の生活改善のために考えられる方策を提案しているものである。その中で名主が強調しているのは、秋山住民の「頑愚さ」である。文字通り頑固で愚かな者共と、その生活を不合理的極まりないものとして嘆いているのである。もちろん「異風」な土地柄への支援を代官に要請する文書なので、代官の同情を誘うべくある程度の誇張や文飾があつたとは考えられるが、それでもやはり名主自身が秋山の生活スタイルを不合理で悲惨なものとして見ていたことは間違いないであろう。史料の中で名主は、秋山村を田畑これ有る場広の所「転宅致させ候はば、世人並みの百姓にも相成るべし」と平地への移住ができればよいのだがと考え、米穀を食し候はば、里地同様人勢盛んに相成り」と、米の食べられる生活こそが人間らしい暮らしだと強調している。米穀を食べさせること、「山林を伐り開かせること」「畠作農業をさせること」、すなわち「里地同様」の生活をさせる

ことで、秋山の者たちは幸福になれると考えているのである。ところが、秋山の住民たちは「不便で貧困」な山中に住み続けようとし、生活を改善しようという意欲は見られない。

それは平野部とは全く異なる生活文化体系をもつ奥山に、当地にそぐわない平地型の生活スタイルを当てはめようとしたことに原因があった。当地では焼畑農耕が一般的に行われていたが、名主の案に見える「焼畑作」は畑地と山林との循環的な利用を繰り返す焼畑ではなく、明らかに「常山」を想定しており、ここには、山を山として利用する視点は全く欠如している。これは山の利用は生活の改善には役立たないと見切った故の判断かもしれない。しかしそれでは、秋山の住民の生きてきた環境や、持っている知識・技能からは相当乖離した生活を強いるものとなるであろう。

秋山の人々が望んでいたのは、山の資源の多様さを活かして営まれる生活であった。そのことは、一八世紀前半の宝永六年（一七〇九）、秋山から大量の材木を伐採する事業が行われようとした際の上申書に示されている。すなわち、秋山は農業よりも山稼ぎ専一の家業で暮らしてきたこと、山稼ぎで「秋山之百姓、永々

新たな狩猟を伝えたのも一八世紀前半のことであった。^{*39}鈴木牧之を案内したような商人が頻繁に訪れるようになったのもこの時期であろう。^{*40}

こうしてみると、我々が今まで近世秋山の生活として描いてきたイメージは、結局のところ一八世紀以降の姿であって、それは激変期ともいべき一八世紀を乗り切り、資源の枯渇や村落間の対立を克服した後の姿でもあったということができる。

もう一つの論点は、近世に起きた秋山および周辺地域での二タイプの「環境改変」についてである。一つのタイプは森林を根こそぎ消失させていくような激しい濫伐であり、秋山の西方や北方から押し寄せてきた。これに対して秋山住民は必死の訴願を行い、時に奥鷹山という幕府の權威を錦の御旗に立てて、山を守り通した。しかしその一方で、秋山住民自身も針葉樹を伐り尽くしてしまい、木工や板材生産がそれまでの通りには続けられなくなってきた。これが第二のタイプの「環境改変」である。しかし秋山の人々は素材を広葉樹に転換し、木工品の種類を替えることでこの危機に対応していった。そしてそれが可能であったのは、多様に自然環境を利用してきた生業の複合性という伝統

相統^{*}していききたいとの願いが書かれているのである。^{*38}これは名主の考える方向性とは全く異なるものであった。

六. まとめ

本章では、大きく二つの論点について述べてきた。一つは、「漠然と昔ながらの生活」と考えられてきたものにも時代による変遷が確実にあり、自然資源利用のあり方やルールに関しても、時期により案外大きな差異があったことである。一八世紀前半に三〇軒台であった秋山の世帯数は、一九世紀前半には七〇軒台に飛躍的に増加し、その変化は、集落近辺を一面の焼畑に変え、また木の美中心の食事から、焼畑で穫れる雑穀に基本的な食糧を変化させた。さらに、サウラ・トドマツ・ツガ・ゴヨウマツ等を利用していた木工品は、それら針葉樹材の枯渇とともに、広葉樹材を素材とした木鉢・木鋤等の木工品に次第にシフトし、ブナやトチ材を使つた木工品づくりで収入を得るようになった。あるいは家屋も掘建て柱の構造から基礎・土台を据えたものへ、壁も草を掻きつけたものから土壁へと変わっていった。秋田から猟師が来訪して住み着き、

であり、それに基づいた森林資源の永続的保全という考え方であった。もともと山中の住民たちは森林を焼畑・林業・木工・採集・狩猟・漁撈などさまざまに利用してきており、一つの資源が枯渇しても代替的な素材や生業に転換できる柔軟性をもっていたのである。そしてそれを根底で支えたのが資源の輻輳する森林環境自体を維持しなければ生きていけないのだという理念だったのである。

奥鷹山のあり方を考えてみても、それ自体は権力者の都合で設定されたものであるが、その維持・管理や奥鷹の献上自体は、山中に暮らす住民たちの協力なしでは成り立たないものである。住民が本気で守ろうと思わなければ奥鷹山も御林山領主が自らの用材確保のために、一般住民の利用を制限した山も、その保全は竟東ないのである。激しい濫伐から山を守つたのは、そこが奥鷹山であったという権力の作用といえるが、やはり背後には、地元の住民自身による森林保全の意志が強く働いていたと考えなければならない。

秋山をとりまく山地資源が大幅な改変をみずに保全されたのは、山に依存し、山と共存することで生活を長らえてきた住民がその環境を守つたからにはほかなら

ない。そしてその背景には、山地に輻輳する多様な資源を活かした複合的な生業・生活の文化があったと理解すべきものとする。

〔注〕

- 1 たたとえば『現代農業 増刊 自給ルネッサンス 縄文・江戸・21世紀』など 農山漁村文化協会・一九九九年五月。またシャレド・ダイヤモンド著・楡井浩一訳『文明崩壊 下』草思社・二〇〇五年)は近世日本では幕府主導で積極的な森林保全が図られたように述べているが、典拠不明の荒唐無稽な理解が随所に見られる。一方で脇野博『秋田藩林政と森林資源保続の限界』(徳川林政史研究所研究紀要 四三・二〇〇九年)は、実証的な立場から資源保全政策について見直したすぐれた成果といえる。
- 2 秋山に関しては、市川建夫『平民の谷』(令文社・一九七三年)、田口洋美『マタギを追う旅』(慶友社・一九九九年)、拙著『知られざる日本―山村の語る歴史世界』(日本放送出版協会・二〇〇五年)
- 島も誕生しておらず、人類史上の原人段階にあたる時期であつて、誕生して千二百年にすぎない「日本」という国の文化とつなげるには落差がありすぎる。
- 8 『記行』四八頁。
- 9 『記行』三三頁。
- 10 『記行』四八頁。
- 11 『記行』五八頁。
- 12 鬼頭宏氏によれば、近世には一七世紀に大きな人口の伸びを見せるが、近世後半には近代の急速な人口増加を前にした一時的な停滞が見られるという(『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫・二〇〇〇年)。
- 13 島田汎家文書七二四号。以下、同家文書は「島田」七二四のように表記する。
- 14 島田「一八二八、一」。
- 15 島田「五二七」。
- 16 島田「二五」。
- 17 島田「四八五」。
- 18 島田「一〇八〇」。
- 19 市河文書「(鎌倉遺文)三九〇四・三九〇八」。
- 20 島田「四四三」。

- ほか。
- 3 『秋山記行』のテキストとして最も入手しやすいのは、平凡社東洋文庫より刊行されている鈴木牧之著・宮栄二校注『秋山記行・夜職草』(一九七二年)。
- 4 樋口淳・高橋八十八編著『語りによる日本の民話・越後松代の民話』(国土社・一九八七年。松本孝三『日本の愚か村話―その特質をめぐって』(『日本昔話研究集成 4 昔話の形態』名著出版・一九八四年)。松永伍一『霧人伝説の里』(角川書店・一九八二年)。
- 5 注2拙著。
- 6 『秋山記行』(平凡社東洋文庫・一九七二年)五八頁に「村家近ければ、大樹原切り広げ、小木は焼畑となす故、日光朗也」とある他、随所で焼畑の風景を描写している。なお、以下同書からの引用にあたっては、『記行』と略す。
- 7 時代的変化を視野に入れないこのような超歴史的解釈は一般にもしばしば見られる。例えば飯田辰彦は『日本文化』のルーツは数十万年に亘る山の文化にあると述べている(『日本文化のルーツは山にあり』『日本農書全集』月報一〇・農山漁村文化協会・一九九五年)。しかし数十万年前は当然ながら日本列
- 21 島田「一〇一〇」。
- 22 島田「一〇七五」。
- 23 島田「一二二八」。
- 24 島田「一〇八〇」。
- 25 島田「五二七」。
- 26 但し、飢饉と集落消滅との関係については、滅びなかつた集落も存在したことからすれば、慎重に考える必要がある。一般に「中興で貧しい生活をしていながら飢饉で滅びた」と考えられがちであるが、実は集落が近接し、利用できる山野が限られていたために暮らしが成り立たなくなつた可能性もある。つまり逆にムラが広大な山野を擁していれば生き残つたとも考えられるのである。
- 27 島田「一〇八〇」。
- 28 島田「一七三七」。また「島田」135の絵図の注記には、「此れ北腰、慶長年中より御巢鷹山にて高倉山の北腰に帯し申し候、則ち信越の境は分明に御座候、証拠は信州分は木立しけり(繁り)、越後分は切か(畑 切替畑 焼畑)・萱地にて御座候」とある。
- 29 島田「一〇六六」。

- 30 島田「一〇八〇の三項目。
- 31 島田「一三三七・一三三九。
- 32 井上卓哉氏のご教示による。
- 33 井上卓哉氏の聞き取りによつて、戦後、桶材がサワラ標準和名というクロベの可能性もある)からスギへと変化したケースや、木鉢の材料となる民有林のトチが枯渇してきて国有林のものを伐採するようになった事例などが明らかになっているが、これなども同様の例として挙げられる。
- 34 天和三年(二六八三)の検地帳には、赤沢村六町一反余・谷内村六町八反余・芦ヶ崎村五町一反余・宮野原村六町一反余などの田地が記載されている(『新潟県の地名』平凡社・一九八六年による)。
- 35 内山節は『里』という思想』新潮社・二〇〇五年)の中で、群馬県上野村に伝わる「山上がり」という風習に触れている。経済的に困窮した人がいると、昔は山に小屋を建ててそこに一年ほど住み、一方で働き手の家族がその間に町場へ出稼ぎに行つて現金収入を持って帰つてきたのだという。山へ上がった家族は、その間、山のものを採取するだけで暮らしを立て、充分生活していったのだという。悲惨な緊急避難ではないかという質問に対して、地元の古老は、むしろ逆だよ。昔は山にさえ上がれば、一年や二年、一銭もなくなつて暮らしていける、という気楽さがあつた」と話し、昔の人は、山にあるすべてのものを利用しきる智慧と技をもつていた」というのである。一つの生業にとらわれない山の資源の多様性・重層性を示す事例といつていいであろう。
- 36 島田「五二七。
- 37 この問題については、拙稿「近世山間地域における環境利用と村落―信濃国秋山の生活世界から―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二三集・二〇〇五年三月)において詳しく触れた。
- 38 島田「二五。
- 39 田口洋美『マタギを追う旅』慶友社・一九九九年)。
島田「一一四七では、長瀬・北野の奥守が、御巣鷹山・百姓持山へ出処知らざる者が猟業に入り込んでいるので、見かけ次第召し捕るべき」旨の高札を受け取つた旨が記されている。
- 40 牧之は秋山に通い慣れているという商人桶屋団蔵の案内で秋山を訪問している。